

〈研究ノート〉

日中戦争前夜の植民地朝鮮で流通していた 日本語書籍

平田賢一（大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター）

はじめに

拙稿「京城帝国大学法文学部の出版活動と岩波書店」（『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』第14号、2017年）執筆のための調査を通して、戦前満洲・朝鮮など「外地」で出版物（書籍・雑誌等）の流通・小売、さらには出版をおこなっていた大阪屋号書店が出版史において注目すべき存在であることが分かってきた。

大阪屋号書店は、濱井松之助が1904年（明治37）、清国の営口で雑貨商「大阪屋」として創業（のち大阪屋号書店と改称）したことから始まり、奉天・大連等へ店舗を置く一方、東京へ仕入部（のち本店）を置くなど事業を拡げ、1914年（大正3）には京城支店を開店していた。

そして、本稿が対象とする日中戦争前夜の1936年（昭和11）11月には京城に朝鮮卸部（代表者・内藤定一郎）を開設し、それに合わせて、『図書総目録 大阪屋号満鮮卸部常備品』（1936年11月、以下「常備品目録」と略す）という676ページにおよぶ在庫目録が作られた（国立国会図書館所蔵デジタルデータ、館外から閲覧・コピーできる）。巻頭の「謹告」で「常備品目録」について「代表的有力出版元の優秀図書を網羅した「恰も全日本有力出版元の総合倉庫」と述べているが、この膨大な目録を眺めるだけでも、日本本国（以下、「本国」）からかなりの書籍が満洲・朝鮮で流通していたことが分かる（満洲卸部にも同じ在庫があった）。はたして、「本国」の出版流通と比べてどの程度の書籍が流通していたのだろうか？ 本稿ではこの「常備品目録」の紹介をしながら、日中戦争前夜の植

民地朝鮮（以下、朝鮮）で流通していた日本語書籍の一端にせまってみたい。

まず、1では朝鮮で出版や流通を担っていた出版元、取次、小売書店などの実態について述べる。次に、2では「常備品目録」の概要を紹介しながら、日中戦争前夜の朝鮮で流通していた日本語書籍について、その一端を明らかにしたい。

本稿を執筆するにあたり、以下の先行研究を参照した。本稿で典拠として表記する際は、（日比2011）のように表記する。

日比嘉高「書店資料から読む外地の読者——『全国書籍商総覧』（1935年）を用いて」

（平成20～22年度科学研究費補助金（基礎研究B）研究成果報告書「芸術受容者の研究—観者、聴衆、観客、読者の鑑賞行動」、研究代表者・五十嵐利治 平成23<2011>年3月）

日比嘉高「外地書店とリテラシーのゆくえ——第二次大戦前の組合史・書店史から考える——」（『日本文学』62号、2013年1月）

日比嘉高「朝鮮半島における日本語書店の展開 戦前外地の書物流通（1）」（『跨境：日本語文学研究』創刊号、高麗大学校日本研究センター、2014年6月）

日比嘉高「戦前外地の書物取次——大阪屋号書店、東京堂、関西系・九州系取次など」

（『Intelligence』16、20世紀メディア研究所、2016年3月）

渡辺隆宏「『周辺』の出版流通—満洲書籍配給株式会社設立への道程、大阪屋号書店その他—」（『メディア史研究』27号、2010年3月）

なお、本稿では地名は当時のままで表記した。また、引用文中に民族に関わる不適切な表現が含まれているが、史料としての原文を尊重して原文どおりとした。

1 朝鮮の出版界

出版物は自費出版等を除いて多くの場合、著者（原稿）→出版社（印刷所・製本所）→取次→小売書店という流れでおこなわれ、読者のもとに届く。日中戦争前夜の朝鮮で、その実態はどうだったのだろうか？ まず、朝鮮で活動した出版元、取次、小売書店について略述する。これらについては、上記日比嘉高氏の一連の論文に詳しいので参照されたい。

朝鮮の出版界について述べる前に、それと連動する当時の「本国」の出版界の状況について簡単に記しておこう。1937年（昭和12）の出版状況について、東京堂年鑑編集部『出版年鑑』（昭和13年版）で1937年前半については「前年度の連続延長に過ぎぬもの」としているのも、『同』（昭和12年版）を見ると、「教育方面の書、修養方面の書、就中、経済、産業、工学方面の出版物が著しく進出して来た」「パンフレット、ビラの類が旺んに刊行された」とし、内務省の納本統計においても、一般書店で取扱った単行本の新刊統計（東京堂調査）においても、それぞれ1649、173種増加していると分析している。その一方で、「部数乃至売行を上々と測定することは早計である」とも述べている。時局的な刊行物が増えているが、出版界の景気としては、まずまずであったというところだろう。

また、当時の出版界について、神保久平（東京堂書店専務）は、「世間では昭和五年、六年と不況に陥っていましたが、出版界はその不況にはあまり影響されずに、伸びる一方でありました。その頃になりますと、東京堂は全国はもちろんのこと、満州、北支、朝鮮あたりが、最も出ました」（尾崎秀樹・宗武朝子著『日本の書店百年』1991年、株式会社青英舎）と述べているが、出版界も業績向上を背景に他の業界同様、東アジア各地に「進出」していた。

さて、当時朝鮮で活動していた出版社について、朝鮮の新聞社・高等諸学校図書館等の一覧が掲載されている『出版年鑑』（昭和13年版）に当たってみたが、朝鮮にある「発行所」としては、東洋青年聯盟社（京城府勸農町2-1昌徳宮前）、二宮丘一家（京城府桜井町2-192）しか掲載されていなかった。

朝鮮での日本人の書籍に関する活動は小売書店から始まり、やがてその一部が出版元になっていく歴史をたどった。朝鮮での日本人の書店の始まりは、1892年（明治25）、咸鏡北道の会寧博文館であった。1906年（明治39）には、釜山に博文堂（吉田市次郎）が開店したのをはじめ京城（日韓書房）、大邱（玉村書店）にも書店ができた。翌1907年（明治40）には22店に増えている（『全国書籍商名簿 明治四十年十一月改正』）。

その後、1921年（大正10）には、朝鮮書籍雑誌商組合が創立され、1926年（大正15）には234店に増加している（『全国書籍商組合員名簿 大正15年4月』）。そのうち1907年から続いている書店は極少数で、書店経営の困難さがうかがえる。また、大正15年4月の名簿では、「出版及販売」、「出版専業」、「図書販売専業」、「図書雑誌販売専業」、「雑誌ノミノ販売専業」の5つに区分されており、出版をおこなっていたと思われるのは「出版専業」「出版及販売」に区分されている60店ということになる。それらの書籍商はそれぞれ以下のとおりである（＊を付したのは朝鮮人が代表者、京城では朝鮮人の書店と日本人の書店は地域ではっきり分かれていたという）。因みに、朝鮮書籍雑誌商組合の会長は大坂屋号書店の濱井松之助であった。

<出版専業> (19)

京城 (4) 栄屋書店（有田榮太郎）正光社（峯崎晃忠）＊青島社（姜鳳会）＊永山房（高光圭）全羅南道 (5) 河村屋書籍部（河上緑）片山洋三商店（片山洋三）伴支店（角健輔）一二堂書店（菊地貢）大島屋商店（藤江坂一）慶尚北道 (2) 文林堂（江口久太郎）文化堂書店（柴岡義憲）慶尚南道 (3) ＊晋陽堂（李東熙）博信堂（松尾謙一）間島佐七郎 黄海道 (1) ＊普恩堂（呉仁明）平安北道 (1) 群書堂書店（今野作右衛門）江原道 (1) 野尻書店（野尻ミヨ）咸鏡北道 (2) 加賀屋文海堂（土里久）＊丸申書店（申鉉道）

<出版及販売> (41)（博文堂は釜山だが、それ以外はすべて京城。朝鮮図書株式会社は代表者名が不明）

一誠堂（加藤澄男）ウツボヤ書店（小島庄次郎）大坂屋号書店（内藤定一郎）＊大山書林（韓鳳熙）＊活文社書店（梁在瑬）＊株式会社

以文堂（金甲濟）＊株式会社朝鮮基督教彰文社（李商在）株式会社友井尚文堂（友井福三）厳松堂京城店（新井武之輔）＊漢城図書株式会社（李鐘駿）群書堂（柳田文治郎）芸文館書店（山本春雄）謙々堂（大野耕一）小池書店（小池福納助）合資会社近澤商店出版部（近澤茂平）＊鴻文園（黄義昌）＊興文社（韓英鎮）＊高麗公司（李秉祚）小林又七朝鮮出張店（久保森平）至誠堂（飯尾耕平）修学館（新井保）青邱堂（辻俊次郎）千光商会（一瀬武内）丁子屋書店（好田貞次郎）朝鮮教育普成株式会社（高橋章之助）朝鮮語研究会（伊藤卯三郎）朝鮮図書株式会社 東京堂書店（高瀬優）＊東洋書院（関大鎬）＊徳興書林（金東縉）日韓書房（岸本貫次郎）＊白熱社（梁大宗）博文社（漢口通、辻末次郎）博文社（明治町、藤野勝次郎）＊博文書館（盧益亨）博文堂（吉田市次郎）文光堂（森田久三郎）＊文友堂（金軫鉉）＊平文館（金吉寿）勉強堂書店（寺村定）森書店（森作市）

その13年後、『全国書籍業組員名簿』（昭和13年1月現在）（『書籍雑誌商資料：内地・植民地／1937～41』第2巻＜戦時占領期出版関係資料集4＞、金沢文圃閣、2004年）によれば、上記＜出版専業＞19社のうち6社（片山洋三商店＜昭和堂と改称＞、伴支店、一二堂書店、大島屋商店、博信堂、間島佐七郎）が、また＜出版及販売＞41社のうち20社（大阪屋号書店、株式会社以文堂、厳松堂京城支店、漢城図書株式会社、群書堂、近澤商店出版部、鴻文園、興文社、小林又七朝鮮出張店、至誠堂、丁子屋書店、徳興書林、日韓書房、博文社＜漢口通＞、博文書館、博文堂書店、株式会社友井尚文堂、文光堂、勉強堂書店、森書店）が載っている。つまり、日中戦争開始後も4割強が書店として残っていたのである。明治・大正期に比べて書店経営が多少安定してきていたのであろうか。

しかし、「出版専業」「出版及販売」となっていた書店の実態はどうだったのだろうか？後藤金壽編『全国書籍商総覧』（新聞之新聞社、1935年9月）に朝鮮の主だった書店が紹介されていて、書店主の略歴、主な取扱書、家族、書店規模などが記されているので、書店の実状の一端を知ることができるが、詳細は不明である。

当時、朝鮮で出版検閲に関わっていた岸加四

郎も、朝鮮の出版の実状について、朝鮮総督府の「文化政策的機関誌」『朝鮮』329号（1942年10月）に「朝鮮出版文化史観——検閲を通して見たる——」を寄稿し、以下のように述べている（1942年10月10日稿）。

単行本はその九割五分迄が京城発行である。…只茲に注意すべきは咸南と咸北、即ち北鮮の地位であつて、…出版文化に関しては、内地よりの移入出版物の関係をも考慮に入れると北鮮の地位は南鮮を凌ぐものがあるのである。…朝鮮出版界は量的質的共に内地特に東京出版圏の一地方的存在に過ぎぬ…単行本は国文諺文共に未だ出版文化を云々するの域にも達して居ない程度にあると云ふ可く、一年を通じて四五十冊の内容外観を備へた良書を選出し得れば、まだしも良い方である。…即ち朝鮮の出版文化なるものを云ふ場合内地移入の書籍雑誌を度外視しては殆ど何の意味も無くなること前述の通りである。

岸は、①京城が出版文化を代表する地位にあったこと、②北部朝鮮の地位にも注目すべきこと、③「内地」からの移入書籍雑誌以外はほとんど意味がないと述べている。確かに朝鮮で刊行された書籍は、量的には移入書籍に比べれば圧倒的に少なかったし、朝鮮総督府やその関連団体による公的な性格の書籍が多かったので、上記に掲げた「出版専業」「出版及販売」の書店の活動も一部を除けば、あまり活発ではなかったと推察される。しかし、その活動については本国より厳しい出版検閲があったことも考慮しなければならないであろう。

また、日中戦争前夜、「朝鮮出版警察月報」に載った「邦文単行本発行届出抄録」（昭和12年1月～6月）には231の書目が載せられており、朝鮮総督府等官庁で発行した書籍が多いが、発行者として徳力新一郎（文林堂）、岸本貫次郎（日韓書房）、松野勝（金城堂書店）などの名前が確認できる。

次に、出版流通を担った取次について述べよう。

当時、朝鮮をはじめとする「外地」の出版流通については、「一生をかけた体験」者であった望月政治は次のように書きのこしている。

日本の出版物が外地に本格的に移出されはじめたのは、日露戦争以後のことで、それまではほとんど、商品としては問題にならなかったようである。…明治三十八年＝旅順陥落前＝大阪屋号浜井松之助氏が先ず満州の営口に上陸…物色の結果、先ず大連に書店を開業し、更に、旅順、奉天、新京に大阪屋号書店を連鎖的に開設して読書人の渴を潤した…これを足場にして浜井松之助氏は、更に朝鮮に支那にと書店網を伸ばしたのであるが、勿論、大阪屋号系以外の書店も、それぞれ各地に漸増した（『わが国出版物輸出物の歴史』1971年、非売品）。

大阪屋号書店系以外では、大手の東京堂、北隆館、東海堂が雑誌の供給を担い、その他に中規模の三省堂、地の利がある関西系（柳原書店、盛文館など）・九州系（菊竹金文堂、大坪惇信堂など）の取次業者もいた。大阪屋号書店は、取次としては中規模であったが、「外地」では事業を広く展開して書籍・教科書の調達・納入を担い、「外地の書店で大阪屋号と取引のなかった書店はほとんど無かったと言ってもよいくらいであった」（同前）という。なお、教科書については、朝鮮南部（慶尚南北道、全羅南北道、忠清南北道、江原道の一部）は、博文堂（釜山）が扱い、朝鮮北部（咸鏡南北道、平安南北道、黄海道、京畿道、江原道の一部）は、日韓書房が7割、大阪屋号書店が3割という割合で扱っていたという。

朝鮮における小売書店の略史については既に述べたが、大正以降の小売書店数については、『全国書籍業聯合会史』（1941年12月発行）に「朝鮮書籍雑誌商組合員組合」の組合員数が掲載されていて、以下のように推移している（ただし、他に朝鮮人だけの組合もあったようだ）。

| | | | |
|-------|-----|-------|-----|
| 1922年 | 27 | 1932年 | 298 |
| 23 | 98 | 33 | 323 |
| 24 | 147 | 34 | 337 |
| 25 | 193 | 3 | 334 |
| 26 | 230 | 36 | 349 |
| 27 | 308 | 37 | 361 |
| 28 | 336 | 38 | 380 |
| 29 | 338 | 39 | 376 |
| 30 | 291 | 40 | 430 |

31 291 41 460

以上から書店数は世界恐慌時期に一時的に減少するものの、大幅に増加していったことが分かる。この店舗数は「本国」の各県と比較しても、1936年（昭和11）9月末段階で、東京（3347）、大阪（1187）、北海道（835）、京都（602）、兵庫（514）、福岡（464）、静岡（361）、新潟（358）、神奈川（350）について10番目である。ただし、愛知県が愛知（285）、名古屋（301）の2つに分かれて集計されていることにも留意しておきたい。このように朝鮮の小売書店数は「人口の多い府県に比肩している」（日比、2011）が、朝鮮は北海道の二倍半を超える面積だから、京城を除けば書店の密度としてはそれほど高くなかった。

また、朝鮮内での書店分布について、日中戦争開始後の名簿であるが、日中戦争前夜とはそれほど変わらないと思われるので、前掲「全国書籍業組合員名簿」（昭和13年1月現在）の朝鮮書籍商組合員（381名）を道別に分類してみる。

| | |
|------------------|----|
| 京城 | 78 |
| 京畿道（水原、仁川、開城） | 11 |
| 忠清北道（清州、永同、忠州） | 5 |
| 忠清南道（大田、公州、天安等） | 18 |
| 全羅北道（群山、全州、金堤等） | 21 |
| 全羅南道（光州、順天、麗水等） | 56 |
| 慶尚北道（大邱、慶州、安東等） | 24 |
| 慶尚南道（釜山、馬山、晋州等） | 38 |
| 黄海道（海州、沙里院、載寧等） | 23 |
| 平安南道（平壤、鎮南浦、安州等） | 22 |
| 平安北道（新義州、寧辺、定州等） | 22 |
| 江原道（江陵、鉄原、春川等） | 5 |
| 咸鏡南道（元山、咸興、興南等） | 29 |
| 咸鏡北道（清津、会寧、雄基等） | 29 |
| （計381） | |

朝鮮全般にわたって分布していること、京城が圧倒的に多いが、全羅南道、慶尚南道、咸鏡南道、咸鏡北道と最南最北の地も結構多く、京城に続いていることが分かる。

続いて、2では書籍・教科書の取次を担っていた大阪屋号書店朝鮮卸部の在庫目録である「常備品目録」をもとに、朝鮮での日本語書籍の出版流通の一端を明らかにしたい。

2 朝鮮での日本語書籍の出版流通 —「大阪屋号書店満鮮卸部常備品 目録」を中心に

「常備品目録」に拠れば、大阪屋号書店朝鮮卸部と取引のあった朝鮮の書店は109店あり、「朝鮮連絡店」として掲出されているので、ここに地方・地域別に掲げておこう（書店名などについては、『全国書籍業組合員名簿 昭和13年1月現在』（前掲）を参照した。＊は代表者が朝鮮人）。因みに、満洲連絡店は69店あった。また＊は朝鮮総督府の「文化政策的機関誌」（岸、前掲）といわれた『朝鮮』の特約販売店（朝鮮全体で24店あった）でもあった書店で、各地域の拠点だったと推察される。

京城 本町一丁目（※大阪屋号書店、三越京城支店書籍部、株式会社三中井、文光堂、金城堂書店） 本町二丁目（丸善京城支店、※日韓書房、勉強堂書店、至誠堂） 明治町二丁目（金剛堂書店） 鍾路通二丁目（＊博文書館、＊永昌書館、＊徳興書林） 寛勲洞（＊北星堂書店、＊東光堂書店、＊以文堂） 清進洞（＊清進書館） 漢江通（詩田天寿堂） 元町二丁目（※盛文堂）

京畿道 仁川宮町（日進堂書店） 開城郡松都面北本町（＊高麗商会） 水原駅前（原田書店）

忠清北道 清州郡清州面本町三丁目（ハカマタ商会）

忠清南道 鳥致院吉野町（小野文具店） 公州郡公州邑内旭町（藤沢本店） 大田 本町（※鈴木書店） 洪州郡洪州面（奥村商店）

全羅北道 金堤邑本町二丁目（迎田商店） 全州郡全州面大正町三丁目（大正堂書店、是永文具店、文化堂） 群山府全州通（赤松大正堂）

群山府明治町（鈴木支店） 益山郡益山面裡里（草ヶ谷商店、久保文化堂）

全羅南道 麗水郡麗水面東町（服部商店） 光州郡光州面本町（加賀谷文具店、大岡支店） 光州郡光州面本町一丁目（阿波屋書店） 光州郡光州面黄金町一丁目（一二堂書店） 光州郡松汀里（細川文具店） 木浦府（＊三一書院、文盛堂） 求礼郡求礼邑（大島屋商店）

慶尚北道 大邱府元町一丁目（博進堂、＊玉村書店） 大邱府本町（＊茂英堂書店） 大邱府東城町（大橋書店） 金泉郡金泉錦町（※立川金

泉堂） 迎日郡浦項仲町（関屋書店）

慶尚南道 釜山府大倉町（※博文堂、三宅本店） 釜山府大廳町一丁目（三重出版社支部） 釜山府大廳町二丁目（広文堂、二葉屋文具店） 釜山府富平町（文盛堂） 釜山府弁天町（呉竹堂書店） 釜山府草梁町（呉竹堂支店、松尾商店）

馬山府郡町一丁目（福屋書店） 密陽郡密陽邑（熊本屋書店） 晋州郡晋州邑錦町（十字屋書店） 統営郡統営面敷島町（砂原南門堂）

黄海道 鳳山郡沙里院（サツマ屋号、池園書店） 海州郡海州邑南本町（金港堂） 海州郡海州邑北本町（高村商会）

平安南道 平壤府大和町（※文鮮堂、中村書籍店、＊積文堂書店） 平壤府本町（三中井支店） 平壤府南町（岡田文鮮堂） 平壤府旭町（＊東文堂書店） 鎮南浦府三和町（※至誠堂書店） 鎮南浦府龍井町（横野喜商店） 安州郡安州面清橋里（＊維新書館）

平安北道 義州郡義州面（稲見商店、齋藤商店） 新義州府常盤町（文明堂、木三商店） 新義州府真砂町（＊大東書林） 新義州府老松町（＊文化堂）

江原道 江陵郡江陵邑本町（＊天恩堂本店） 鉄原郡鉄原面官田里（五島商店） 春川郡春川本町（佐々木百貨店）

咸鏡南道 咸興府軍営通一丁目（昇文堂書店、丹野商店） 咸興郡咸興面軍営通（＊光文堂） 咸興郡咸興面東陽里（柿並書店） 咸興府住吉町（＊興文堂） 咸州郡興南邑

九龍里（咸南堂書店） 咸州郡興南邑湖南里（咸南堂書店、以上二つの咸南堂書店は共に朝鮮窒素肥料株式会社供給所であった） 咸南駅前（キリンヤ商店） 元山府仲町一丁目（東書店） 元山府本町四丁目（大谷商店） 元山府南村洞（＊ウリ書店） 元山府広石洞（＊文化書院） 北青郡北青邑（＊文化株式会社）

咸鏡北道 会寧郡会寧面会寧邑銀座通（博文堂） 会寧郡会寧面南本町（每朝堂書店） 城津郡城津面南本町（岡本商店） 清津府（中屋甚吉） 清津府羅南 本町（田原新聞雑誌舗、杓掛商店） 清津府羅南生駒町（※北光館） 鏡城郡梧村面（＊雉城書院） 慶興郡羅津府（溝口盛文堂） 慶興郡新安面新安（三船商店）

1936年9月末の段階で朝鮮書籍雑誌商組合に所

属していた書店は349になるので、109店と直接取引していた大阪屋号書店朝鮮卸部は約3割の書店と取引があったことになる。

また、大阪屋号書店朝鮮卸部と取引のあった出版社277社は以下の通りである（原本通りの順番。また、岩波書店・改造社・春陽社などはジャンルによって分かれている。数字は在庫書目の点数。同じ書目で上製本と並製本がある場合1点とした。大阪屋号書店（京城）は在朝鮮の出版社）。

アルス54 朝日書房40 青野文魁堂22 岩波書店488 岩波全書80 岩波文庫681 一進堂21 一元社27 内田老鶴圃176 上田泰文堂（三日月社）25 英進社（彰文館）22 大倉書店47 大阪屋号書店（東京）159 大阪屋号書店（京城）277 大阪屋号書店（大連）22 大阪屋号書店（奉天）10 大石堂12 大岡山書店28 岡村書店100 欧米旅行案内社6 岡倉書房65 欧文社17 音楽世界社50 改造社33 学芸書院12 改造文庫326 学習社15 学而書院19 学芸社56 カニヤ書店52 河出書房22 外語研究社46 開隆堂13 外語学院出版部19 学校美術協会出版部21 金星堂37 金の星社115 金蘭社115 教文社12 協和書院8 共益商社253 共立社199 軍人会館出版部（川流堂扱）30 栗田書店22 研究社211 健文社132 敬文館10 建設社17 慶文堂98 敬文堂35 玄鹿洞書院8 賢文館86 玄光社22 言海書房68 コロナ社81 小林川流堂30 小山書店39 古今書院215 厚生閣423 工業図書株式会社101 工業教育会5 工業雑誌社22 洪洋社241 広文堂書店（広陵社）64 広文館23 弘道館30 弘道閣50 弘文堂書房165 弘文社18 弘学社35 宏文堂24 甲文堂45 光風館8 高陽書院63 光世館32 光大社12 興教書院18 交蘭社50 交通経済社14 交友社39 国民工業学院52 国勢社15 香風閣11 黒白書房28 三省堂76 笹川書店10 三成社28 三友社65 山海堂出版部91 サイレン社26 西東社30 作品社26 新潮社318 秀文閣書房10 新小説社34 新英社13 新生閣70 新陽社7 新生堂30 駸々堂298 信友堂26 実業之日本社124 自治館29 資文堂20 四条書房40 四海書房13 裳華房49 松山房27 松陽堂25 小学館76 昭晃堂10 松華堂30 松栄堂30 尚文堂74 書物展望社9 章華社75 秋豊園13 昭森社19 昇龍堂27 正文館155 修文館54 修教社45 春陽社8 春陽堂82 春陽堂文庫158 日本小説文

庫389 少年少女文庫158 春秋社85 春江堂30 受験研究社117 芝書店28 清水書店128 鈴木書店48 崇文堂53 数学研究社18 杉山書店21 誠文堂新光社278 清教社13 誠光堂19 西東書林16 青々書院23 青年教育普及会33 青雲堂8 成美堂105 清和書店26 素人社21 創元社65 叢文閣64 双雅房26 大日本雄弁会講談社354 大日本図書株式会社52 大日本工業学会30 大明堂57 大修館63 大雄閣29 大同書院140 大同館書店164 大地書院15 大文館32 大観堂11 大学書林30 太陽堂114 泰文館79 第一書房226 第一出版協会66 タイムス出版社40 高岡本店64 竹村書房62 立川文明堂39 田中宋栄堂175 中央公論社240 千代田書院14 中興館25 中文館365 中央工学会53 千倉書房123 知進社18 地人書館17 鉄道時報局38 天業民報社8 鉄道図書局55 電気之友社19 東京堂28 東京泰文社20 東洋図書株式会社297 東洋書院18 東洋経済新報社37 東方印書館18 東宛書房78 東学社47 刀江書院109 同文館153 同文社（東京）28 同文社（大阪）30 常盤書房36 徳文堂30 ナウカ社36 永沢金港堂8 那須書房14 南光社109 中村書店41 内外書籍株式会社4 内外出版印刷株式会社87 日本評論社119 日本辞書出版社18 日本公論社46 日本外事協会8 日本国際協会15 日本出版社109 日本放送出版協会40 日支問題研究会9 二松堂48 西ヶ原刊行会64 野ばら社22 博文館39 培風館122 白揚社53 白水社79 服部文貴堂56 富山房150 富文館45 文求堂86 文修堂16 文明社23 会40 日支問題研究会9 二松堂48 西ヶ原刊行会64 野ばら社22 博文館39 培風館122 白揚社53 白水社79 服部文貴堂56 富山房150 富文館45 文求堂86 文修堂16 文明社23 文友堂58 文化書房244 文憲堂37 文教書院48 文書堂88 文泉堂書房88 文原堂15 文録社35 文信社49 武揚堂（東京）145 武揚社（京都）120 藤谷崇文館121 藤井書店38 黎明社7 婦人之友社29 仏教年鑑社（新興出版社）24 平凡社101 龍文舎8 宝文館57 芳文堂168 北隆館8 法律評論社48 北海出版社39 右文書院7 星野書店20 丸善122 丸山舎14 マネジメント社40 林平書店9 松邑三松堂48 三笠書房27 目黒書店171 三浦書店11 明治図書株式会社136 明善社11 明治書院90 明文堂155 モナス68 森山書店108 洋々社10 山本書店14 有斐閣332 有朋堂54 有精堂60 雄山閣60 有誠堂11 淀屋書店120 養賢堂204 吉田工

務所出版部29 立命館出版部86 龍吟社52 理想社出版部56 六盟館18 早稲田大学出版部112 学友館63

また、書籍の内容も以下のように33に分類されているが、ほぼ全分野を網羅しているといえよう。

皇室 哲学 宗教 軍事 教育 社会 政治
法律 経済 交通 商業 農業 水産 工業
数学 歴史 地理 理科 医学 工学
国語国文 漢文 外国語 文学文芸 美術
音楽 演芸娯楽 体育 家庭 少年児童 受験入学 図書新聞 事彙

『出版年鑑』昭和12年版によれば、1936年（昭和11）の「発行所一覧」には1800を超える発行所が載っているが、朝鮮・満洲等「外地」の発行所、同人誌・研究所など出版社ではない発行所を除くと、1200ぐらいが出版社として営業していたと思われる。大阪屋号書店朝鮮卸部が取引している出版社は277なので、約4分の1である。また、扱っている点数は18000を超える。上記のリストから取扱点数の多い出版社（100点以上を取り扱っていた58社）を挙げると以下のようになる。

岩波書店 1136（うち岩波文庫568、岩波全書80） 大阪屋号書店 468（東京・京城・大連・奉天） 厚生閣 423 日本小説文庫 389 中文館 365 改造社 359（うち改造文庫326）

大日本雄弁会講談社 354 有斐閣 332 新潮社 318 駸々堂 298 東洋図書株式会社 297 誠文堂新光社 278 共益社 253 中央公論社 250 文化書房 244 洪洋社 241 春陽堂 240（うち春陽堂文庫158）

第一書房 226 古今書院 215 研究社 211 養賢堂 204 共立社 199 内田老鶴圃 176 田中宋榮堂 175 目黒書店 171 芳文堂 168 弘文堂書房 165 大同館書店 164 少年少女文庫 158 正文館 155 明文堂 155 同文館 153 富山房 150 武揚堂 145 大同書院 141 明治図書株式会社 136 健文社 132 清水書店 128 実業之日本社 124 千倉書房 123 培風館 122 丸善 122 藤谷崇文館 121 武揚社 120 淀

屋書店 120 日本評論社 119 受験研究社 117 金蘭社 115 金の星社 115 太陽堂 114 早稲田大学出版部 112 刀江書院 109 森山書店 108 成美堂 105 南光社 104 工業図書株式会社 101 平凡社 101 岡村書店 100

以上、この一覧から、大日本雄弁会講談社をはじめ、中央公論社、改造社、誠文堂新光社、実業之日本社など当時の大手出版社、岩波書店、有斐閣、日本評論社、丸善など学術系出版社、明治図書株式会社など教科書系の出版社の書籍を多く扱っていたことが分かる。「本国」に比べ、扱っていた書籍の種類は少ないものの、学術書・専門書をはじめ、主要な書籍は揃っていたように思われる。「はじめに」で紹介したように、「常備品目録」で「代表的有力出版元の優秀図書を網羅」した「恰も全日本有力出版元の総合倉庫」と自負しているのにふさわしい品揃えだったのではないかな。

ここで最も取扱点数の多い岩波書店との関係について記しておこう。岩波全書は全点、岩波文庫も品切れの6点を除き全点を在庫としてっており、単行本については精査できなかったが、主要なものは在庫していたようだ。これらのことは、以下に記すように、従来からの岩波書店と大阪屋号書店との親しい関係や当時の読者傾向に基づくものであった。

大阪屋号書店の浜井松之助は息子の弘（後、講談師神田山陽）に次のように語っていた。

おやじは口ぐせのように語りました。

「岩波茂雄さんに初めてあったのは、わしが北鞘町に店を出したときだった。新刊の哲学叢書を支店に送ってくれという。わしは断わった。こんな難しい本は売れませんと。しかし彼はかならず売れますと執拗に迫った。その熱心さに負けて送ったところ、売れに売れた、ものすごく売れた。あんな難しい本が売れるとわかっていたのは彼が帝国大学を出ているからだ。だからおまえも大学へ行きなさい」と。いとも単純な理由なのです。しかしその後、岩波さんもおやじの商才を高く評価したとみえ、ちょいちょい閑のあるごとに、店を訪れてみえました（神田山陽『桂馬の高

跳び』光文社、1986年)。

また、『書店文化』第1号(1937年10月20日)に掲載された「販売の研究 京城・大阪屋号の新案「補充カード」よく売れる本は何時も充実」という見出しの記事に以下の記述がある。

昭和二年岩波書店が岩波文庫を出した時、京城店主内藤氏が岩波茂雄に会つて同文庫の整理上カードを使用すべきことを献言したところ、岩波氏は大いに共鳴して、現在のあのカードを挿入するやうになつたさうである。

そして、当時の朝鮮での読者について「最もよい書店の顧客は内地人学生々徒であるが、日本人教育を受けてゐる鮮人学生々徒も漸次有力なる読書階級となりつゝある」(前掲『全国書籍商総覧』所収「朝鮮書籍雑誌商組合略史」と述べているような状況があつて、学術書・専門書を多く扱っていたのであろう。

最後に、当時、「本国」では検閲等によつて、「時局多難の折から、左翼分子の徹底的一掃が行はれ、特に輸入書は嚴重を加へた」(『出版年鑑』昭和12年版)という状況であつたが、「常備品目録」ではマルクス、エンゲルス、レーニン、河上肇等の著作(改造文庫、岩波文庫、弘文堂書房等が版元)が扱われていたことを付記しておきたい。

おわりに

以上、日中戦争前夜の朝鮮における日本語書籍の流通について論じてきた。具体的な書目をほとんど挙げることができていない不十分なものであるが、その一端は示せたと思う。「本国」に比べれば、流通していた書籍の数は少ないが、学術書・専門書などの主要なものは流通しており、読書環境としてそれほど遜色はなかったといえるのではないか。

また、本稿では言及することができなかったが、朝鮮で刊行された日本語書籍・雑誌、移入された日本語雑誌、朝鮮語の書籍・雑誌の流通についても、今後の課題としたい。